

意見交換

吉川圭太（司会／神戸大学） それでは意見交換を始めたいと思います。東北と国会図書館、長岡の方から活動の報告を頂きました。この会は情報交換会ですので、まず、阪神・淡路の方から今日の各ご報告を聞いた感想も含めまして何人かの方にコメントを頂きたいと思います。まず、神戸大学附属図書館の郷原さん、よろしいでしょうか。

郷原正好（神戸大学附属図書館） まず、東北大学さんの授業との連携が非常に面白いなと思いました。これはちょっと大学サイドの話なんですけれども、神戸大学では余り出来ていないところがあって、神戸大学でも阪神・淡路大震災の授業を持っているところがあるので、そこに色んな人が語り継いだりとか、授業があるみたいなんですけどそういうそういうところの連携とか、していきたいという風に思いました。震災文庫も今、5万点ぐらいあって、5千点ぐらいのデジタル化して公開することが出来ているんですけども、やはりその部分、色々な図書館さんが公開をして頂ければいいなと思います。文書資料室についても色々と集められてどう連携しようかという話がありますけれども、じゃあ、具体的に事例をこういう風にしたらこういう問題あるだとか、こういうことがあるだとか、というのを公開していくようにしてもらえると、次にそういうところをローカルな問題があるかもしれないですけども避難所がどうしていくかという時に色々と経験になってくると思うんですね。神戸も恐らく東日本に行った時に、神戸流じゃダメだとか、色んな意見があったかもしれませんが、やっぱりそれはローカルルールはローカルルールで上手く使えるものがあるはずだと思います。国会図書館は色々な取り組みをされて、東日本中心ですけども中越も含めて今までの震災のところ、阪神・淡路も含めて

一緒に何か取り組みが広がっていけばいいなという風に思いました。以上です。

吉川 ありがとうございます。東北大学附属図書館の湯目さん、郷原さんからもありましたが授業との連携といいますか、震災資料をどのように活用していくかという時に授業との連携というのはまず一つ考えられるということで今日出ましたけれども、この点に関して神戸学院大学の方で、授業で実際に避難所の資料などを使っていらっしゃいます水本先生の方から何か今日の感想も含めてコメントを頂ければと思います。

水本浩典（神戸学院大学） 今日は本当に沢山の図書館、それと国会図書館という一堂に集まって頂いて、本当に良いお話を聞かせて頂きました。どのように取り組んでおられるのか、というようなことについてはなかなか個々にアプローチしないと分からないことをこういう形で勉強させて頂く機会なんていうのは私にとってはありがたかったということです。実は、私も細々と震災資料の勉強をやっておりまして、個人でやるのには限界があるもんですから上手く学生をおだてまして、資料の整理だとか、そういうところへ少しずつアプローチをしてもらってます。それをやっているうちに、学生が非常に興味を持ったり、または「えっ、こんなことがあったのか」という形で段々深みにはまってくれます。今日、来ておりますのは、ドクターの3年生で今度4月から課程博士になるんですけども、震災資料そのもので研究論文を書いて課程博士になる。マスター1年のもある小学校の震災資料をずーっと研究して、先ほど田中さんがおっしゃっていたように18年、19年経った神戸の震災のある小学校の状況はどうだったんだろうか、実は現状はほとんど分からない状

態に今、なりつつある状況です。いかに復興誌を読もうと、または他のところで書かれたものであろうと、または色んな記録を読もうと、ある学校が本当にどうだったかという時には生の資料を手当たり次第に当たってみるより方法がない、というのが実情だと思っております。そういう意味では後でお話があるかもしれませんが、長田区役所に震災資料室というのがありまして、そこへたまたまですけれども、学生と一緒にいらせてもらって資料整理のお手伝いを始めたと。それが学生にとっては非常にいい勉強になっていると。それを後輩が見て、「私もそういう勉強が出来たら嬉しいな」と。たまたま長岡に行くので、というようなことから「きみ、長岡にもそういう資料があるんで一度資料整理にお手伝いしてみたらどうか」と学部3年生が来ているのは長岡の中越の震災資料に関わる形で入ってきた。色んな形で震災そのものを経験していない、一人は姫路ですし、一人は高知県ですから、この後郷里に帰ってしまいますと、多分南海トラフ地震で死ぬんだろという学生ですし、一人は富山で山脈越えてますので長岡とは関係がない。でも、やってみたいなことです。東北大学の方でそういう学生へのアプローチという話を聞かせて頂いて、そういう格好のアプローチが色んな大学でも今、試みられつつあるんだと。特に、東北大学さんは今日も出ておりましたけども狩野文庫の資料が出ておまして、狩野亨吉さんのいわば精神、大八車でゴソッとあらゆる資料を購入して、それが狩野文庫の貴重なものになっていくんだと。あらゆるものを集めていくというような狩野文庫の精神が図書館に生きているのかなと思って、すごく私は「ああ、いいお話を聞かせて頂いた」と思っております。やはり図書館ですから活字資料に重点がいつてしまうのは仕方ないと思うんですけども、東北大学のお話にもありましたように、「何でもいいから残して」くれておればというように思っております。学生が見つけるのも非常に変なところから入って、変なところにこだわりながら勉強を始めます。ですから、報告書のようなサラッ

としたものよりは生のものの持っているインパクトというのには、私がしゃべるよりはよっぽど学生は資料をもつてのところのいい勉強が出来ていると思っております。最後に1点だけ、田中さんの今日のお話の中で、震災資料の「資」が歴史の「史」だったんですけれども、私なんかはデータの方の「資」を使うんですが、あれをわざわざ歴史の「史」をお使いになった意味を一度お聞かせ頂いたらと。その辺は佐々木さんも一言おありになると思ひまして。宜しくお願いします。

吉川 はい、では田中さん、震災資料の「史」についてお願いします。私も少し疑問に思っていたので。

田中洋史（長岡市立中央図書館文書資料室） そうですね。自分でも冷静に客観的に分析しなきゃと思っているんですが、元々はデータの「資」の方を使っていたのをご存知かと思います。そういった中で、歴史の「史」の「史」という観点を入れたのは少し限定したということになりますよね。歴史資料ですね、歴史の「史」を使っている場合は。文書資料室という捉え方なので、市史編集室でしたからうちはどうしても歴史、修史事業に特化した部屋です。まずうちの部屋としての文書資料室として活用していくのであれば歴史の「史」料として避難所資料を活用していくと。そういう意味でこの図録を出す時、（新潟大学人文学部の）矢田先生は史料という言葉を使って、そういう絞り方ですね。歴史「史」料として。ただ、当然歴史史料というレッテルを貼り過ぎるのはよくないと思ってまして、そういう意味ではデータの「資」料という風にそれはまたもう一回広げ直して頂いてもいいと思いますし、使われる方というとあれですけども、ひもとく方によってデータの「資」料として使って頂いてもいいし、私たちの部屋はどうしても歴史資料として使っていくとそういうことでありまして、どちらでなくてはならないという限定ではなくということでもあります。そんなところでよろしいでしょうか。

吉川 ありがとうございます。では、佐々木さんの方からお願いします。

佐々木和子（神戸大学） 私の方は、歴史の「史」ではなくてデータの「資」を使っています。それは私たちが始めたのが96年というところで、まだ私の感想といいますか、その時の意見はまだ歴史の「史」を使って限定するところまで行っていないと。ですから、それよりももっと幅広く集めようというのがまず前提にありました。ですから、歴史の「史」というまあ言えばその中で記録史料になっていくだろうけどもその段階で記録史料になるものしか集めないのではなくて、幅広い範囲で集めよう。そのうち、ハッキリ言いますと玉石混交だろうと。そして、意味があるかどうか分からない、意味がないかもしれない、そういうものも含めて集めるという意味で、歴史の「史」ではなくてデータの「資」を使いました。そして、今、考えますと私の視点では玉石の石の方かもしれないけれども、いつ玉になるかも分からないなあということも思いながら扱ってきたところですよ。

吉川 ありがとうございます。先ほど、水本先生の方からお話がありましたけども、玉石混交のような資料を实际使って研究をやられている当事者である学生さんのうちどなたか、どうでしょう、林田さん、感想でも頂ければ結構ですのでよろしくお願いします。

林田怜菜（神戸学院大学） 今日は皆様のお話を聞かせて頂いて、図書館の皆様は色々悩みながら資料の収集などをされているということが初めて分かりました。田中様のお話などをお聞きしながら学生と市民の方が共同して資料整理をしている様子なども教えて貰って、これからも自分も頑張っていかなければと思い、勉強になりました。ありがとうございます。

吉川 ありがとうございます。今日、ご報告されていない方、コメントされていない方で、もし、感想等も含めてご意見がある方がいらっしゃればこの場を出して頂ければと思います。兵庫県立図書館の谷口さん、お願い出来ますでしょうか。

谷口充利（兵庫県立図書館） 兵庫県立図書館です。今回の発表を聞かせて頂きましてやはり公共図書館という立場からも考えてなんですが、やはり他館との連携がすごく大事だなと一層感じました。県立図書館でも震災関連の企画展示等、色々展示はしているんですけども一館の企画展示等ではなくて、東日本大震災を経験された図書館との連携ですね。具体的に去年は岩手県立図書館さんの資料をお借りして「震災－過去・現在・未来－」という形で企画展示をさせて頂いたんですけども、こういった形で今後とも引き続き連携を深めていきたいと思いました。以上です。

吉川 ありがとうございます。今日はこの会自体が連携の会、情報交換の会ですけども、ここからはご報告頂いた方から他の方への質問なども含めまして何かコメントなり質問等を頂きたいと思います。では、田中さん、よろしくお願いします。

田中 今日はどうもありがとうございました。色々感想はあるんですが、例えば東北大学さんのシラバスを検索して先生方の研究室を訪ねられたという、こういうアプローチの仕方があるんだなというのをちょっと思いまして、例えば、市役所に置き換えれば市議会議員さんとか、そういう施策で言っている方とか、それぞれホームページがあるのでやはりこちらからアプローチするといえますか、そういうのがあるんだなということを勉強させて頂きました。質問は、ちょっとどちらということはないんですが、もし、お答え頂ければなんですが、長岡にも「震災資料を図書館に」というキャンペーンのポスターが新潟県内にも沢山貼られていて、東北の皆さんが連携してやってもらえるような感じのポスターが貼ってあったん

ですが、そういった活動の現状とか課題とかあれば。実は新潟中越地震の時はああいう雰囲気は残念がらなかったものですから、やはり進んでいるなあという風にポスターを見てちょっと思いまして。その辺のところをお分かりになる方がいらっしゃいましたら「震災資料を図書館に」というキャンペーンの現状を教えてください。

吉川 はい、現状ですね。それぞれの現状をお話頂ければと思います。それでは岩手大学の遠山さんの方から。

遠山正宏（岩手大学研究交流部情報メディア課）
その「震災資料を図書館に」というキャンペーンはどちらかというと東北大さんが音頭を取ってという声掛けして頂きまして、大学図書館も参加してということで活動を行っております。

吉川 はい、ありがとうございます。東北大学の湯目さん、よろしくお願いします。

湯目昌史（東北大学附属図書館） お尋ねになりたいことはキャンペーンの効果のほどでしょうか。

田中 連携でどんなことをされているのか。

湯目 具体的にはポスターを貼っているだけといえますか、チラシをまいているだけといえますか、待っては全く来ません。状況は皆さん方変わらないと思うんですけども、積極的にお声がけをするんですが、声かけもその他大勢に向かって「くださいー」とどこぞの選挙演説みたいなことをいくらやってもダメで、直接機関に足を運んで。この辺は宮城県図書館さんはすごい足で各地を回られていらっしゃるので私よりも分かると思うんですけども、東北大でやったのは一応大学の性質上、学術文献ということで学協会、怪しい学会、協会も山ほどありますので、一応法人化されている協会の方にリストを筑波大学にもらいまして、

そこに直接館長名で文書を出して「ありましたら、寄贈をお願いします」と4割ぐらい帰ってきて、資料が来たのは3割弱ぐらいでしょうか。それもメールとかでやりとりしてますと、資料の認識というのが「何かしらの報告書、完成されたものはありません」というお返事です。そうじゃなくて、普段の事務文書でもいいですし、ちょっとしたチラシでもいいですし、シンポジウムか何かのレジュメの中に震災に関するコメントがあればと言うと、「そんなんでもよかったら」と言って広がったり。働きかけ方が非常に大事。待っては来ません。ぜひ、宮城県図書館さんに。車で回られているので。

吉川 それでは宮城県図書館の佐藤さん、よろしくお願いします。

佐藤まどか（宮城県図書館） 宮城県図書館の資料収集ですけれども、実は昨年あたりから県内を巡回しておりまして、どちらかといえば沿岸部の資料が多いのが現状です。昨年度、平成24年度につきましては、どちらかといえば人が集まるようなところに配布資料として置いてある資料というのを頂いてきている分が多かったんですが、それだけではそろそろ限界が来ている。ということで昨年度同じようにそういう配布資料ももちろん集めてはいるんですが、その他に社会福祉協議会ですとか、商工会ですとか、あるいは小学校・中学校・高校の長のつく方々の会議で「こういうことで震災資料を集めています。ご寄贈ください。将来に残していきたいんです」ということをお話させて頂いて集めております。比較的順調にしているのが社会福祉協議会さん関係の資料です。関わっていらっしゃる資料が順調に集まっております。と言いますのもやはり災害ボランティアセンターを立ち上げ以降の活動がありますので、そういう記録が残っている。ということで比較のご協力頂いている社会福祉協議会さんが多いです。ただ、どちらかというと沿岸部の方が日々の支援の方に追われていて、実際、住民の方々、仮設住

宅の方々あるいは、そこから一步進んで公営住宅に移られた方もいますけれども、そういった方にお配りした資料があるけれどもそれをまとめているので、そろそろまとめないとダメだね、という話を今、しているところです。というところが今、非常に沿岸部に関しては多いです。それから、内陸部の社会福祉協議会さんですと、定期的に沿岸部の方へ支援に行ってるんですね。その支援の時に例えば、物資を持っていくこともありますし、そうしますとそういった物資の収集の呼びかけですとか、そういったものがあると。内陸部の方はそういう意味では比較的にやったことをまとめてらっしゃるところが多いので、「頂けませんか」というと「じゃあ、探して後でお送りします」と送ってくださるところが多いです。それから、商工会さんはどちらかといえば沿岸部の方が事業者自体が被災しておりますので、事業再建の相談会ですとか、そういうものを積極的にやっていらっしゃるので、そういうところが多く資料が残っているのが現状です。いずれにしましても、直接出向かないと難しいというのは非常に感じております。あと、意外と反応が返ってこないのが実は学校関係なんです。「アーカイブ」ということもあって、そういう話をするから余計警戒されるのかなという気はしているんですけれども、例えば、卒業式の式辞、そういうものの原稿やコピーでも構いません、という話をする「確かに名前が出ていないけれども、その状況を言っちゃうと誰か分かるようなこともしゃべってるからちょっと出せない」とそういうことが返ってきます。もしかしたら、もうちょっと過ぎれば名前が出ているわけでもないし、いいのかなと思いますけれどもやっぱり精神的にはまだ「はい、どうぞ」と言える状況ではないのかなというのが学校の状況です。せめて被害を受けた時の建物があちこち傷んでますから、修理の工事を入れるための予算要求のための写真は撮っているはずなので、せめてそういったものだけでもご協力頂けないかなと私としては思ってるんですけれども、なかなか学校はそういう意味ではちょっとガードが強いというの

が現状です。

吉川 ありがとうございます。国立国会図書館の長崎さん、「震災資料を図書館に」というポスターの取り組みについて現状等で何かありましたら、よろしくお願いします。

長崎理絵（国立国会図書館） 東北大学さんなどがされている「震災資料を図書館に」の取り組みにこちらも協力させて頂いているんですけれども、具体的にその取り組みプラス岩手、宮城、福島県の県立図書館さんとは個別に協力関係を結ぶ協定書というのを取り交わさせて頂いております、具体的には、資料を市町村立図書館さんなどで集められた資料を余部があれば国会図書館の方にも頂きたいとか、逆に、国会図書館の方でも東京の関係機関に色々と呼びかけをしております、そういったところで持っている資料はうちの納本以外にもそれぞれの岩手、宮城、福島県の県立図書館さんの方へ「ご寄贈お願いします」ということを言ってるんですね。そういったことを取り決めの中で言わせて頂いている関係で資料が集まってきているかなというところですか、あと、デジタル資料で県立図書館さんで持っているけれども、なかなか保存が難しいというものについては国会図書館の方にもご寄贈頂いてですね、こちらの方で公開するという手があります。例えば、福島県立図書館さんからは福島県の新地町というところの図書館にある写真をご寄贈頂いたんですけれども、ちょっと福島県立図書館さんの方ではデジタルアーカイブは作る予定がないということだったので、こちらに直接ご寄贈頂いたというようなケースもありますし、あと、書誌データの連携ですとか、そういった形で色々情報交換や協力関係を結ばさせて頂いております。私たちは東京にいますので、なかなか被災地の資料の収集にどうお役に立てるのかということを常に考えているんですけれども、そういった形で出来る限り自分たちの身近の団体に行って、そういった団体の支部というのが被災地にありますので、そういっ

たところの機関さんに呼びかけて頂いて、資料をそれぞれ「被災地の方に送ってください」という風にお話しています。例えば、生協さんですと、生協の東京にある本部に行って、みやぎ生協とか、いわて生協、ふくしま生協とかありますので、そういったところで作られた資料についてはそれぞれの県立図書館さんの方にも入れてくださいとお話したりとか、全国社会福祉協議会さんの方に行って、それぞれの県社協さんや市町村の社協さんの方で作られているものについては「県立図書館さんにも納めてください」、という風にお話をしています。そういった形で少しでも支援出来たらなという風に思っています。逆に、私たちの方で何か出来ることがあればドンドンご要望というか、ご意見頂けると大変ありがたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いします。

吉川 ありがとうございます。他の方でそれぞれの報告に対しての質問等でも結構ですので、ある方がいらっしゃいましたら。では、高森さん。

高森順子（人と防災未来センター資料室） 当センターで3年間、専門員をしておりましてこの3年の任期で終了するんですが、質問ではないかもしれないんですけど、どうしてもお伝えしたかったことがありまして、ちょっとお伝えさせてもらえればと思っています。今、当センターでは常設展は触れない状態なんですが、年1回ないしは年2回、展示もさせてもらいながら収集、保存、活用、連携をしてるんですが、この1～2年で東北の震災があったことで、相当ダイナミックに変化があったと私は思っているんです。それは大きな点としては収集、保存、活用、連携という形で順序立てていくというよりも全部がミックスになっているな、というのが正直なところでちょっともしかしたら今日展示を見てくださったかもしれないんですが、当センターでは西館2階で定点観測の写真展を今回ちょっと担当でやったんですけど、震災から19年経っている状態で、神戸市民のほぼ4割が震災を知っていないと

いう現実があって、その中で震災当時61歳だった大仁節子さんという一般の方が阪神間の数百か所廻られていたうちの190か所を定点観測されてまして、震災後と3年後なんですが、それを今回発掘させてもらって、それを公のものとすると同時にその存在も知って頂こうということで今回展示したんですね。その時に、通常ですと集められたものを展示するというパターンですが、それの定点観測という性質だったからなんですが、現在の写真を大学生と一緒に撮りにいくということもさせてもらって、現在と三つの写真という形で場所の同定からその撮影までをしたんですね。これでどういうことが言いたいかというと、要は収集をするということですね、いわばこの一次資料である19年目の神戸の写真というものを作る過程というものがもう伝承になっているということでミックスされているとも言えますし、その伝承の瞬間に立ち会っているという状況があったわけです。それを考えると、「収集はどうしよう」、「保存はどうしよう」、「活用はどうしよう」と分けて考えるのではなくて、ある意味ではそこはどけた形で定点観測という一つのキーワード、これは何でもいいと思うんですけども、災害の大学生がやれることというようなテーマだったりとか、様々なことがあると思うんですが、何かテーマを決めた中で、収集が出来たり、それが活用になったりという形で分けずに考える方が今は神戸の場合だとずーっと同じことの繰り返しのような状態から脱却できるのではないかなというのが正直なところで最後の連携のところでは、これのトークイベントという形で今日1日に大槌と仙台で定点観測をしているグループと当センターで展示に関わった大学生とのトークセッションというのを行ったんですね。そういう活動という形で連携も出来るという点が一つと、あと、ほぼ仮決定ではあるんですが、展示が3月2日までなんですけれども、3月8日からせんだいメディアテークで定点観測の様々な団体の展示があるんですが、そこにもちょっと参加させて頂けることになったんですね。言いたいこととしては、様々なフェー

ズがあると思うんですが、それを一度はずして考えてみるということが今の神戸だとそういうことが起きているわけですね。あと、もう一点なんですが、これは一次資料が出来る過程の話だったと思うんですが、今度は二次資料ですね、編集物としてこれから作られるにあたってなんですが、当センターで3年やっていく中でとても感じたことでは刊行物にせよ、何らかの編集を施すという意味では一次資料を渡す際に、「こういうのありませんか」と言われて自分がハンドリングしていくというのも一種の編集だったと思うんですけども、そこでこれは考え方としてどうかというご意見があるかもしれないんですが、恣意的になることを恐れないでいいのではないかなということをして正直、今、思っているところで、どうしてもベーシックにこういう話が来ればどのご意見も全部入れるということを考えがちなんですが、そうなるのかなりの数になってしまったりとか、編集するにあたってどこが本当は重要なのが見えにくいものになってしまうシーンがあると思うんですね。そういう時に、総合的にやる編集的なものも作ると同時に、ある意味でものすごく焦点を絞ったものを出すことで各館の特徴を出していくとか、両方をするのはとても大変だと思うんですけども、それがすごく大事だと思いますし、もし、それでちょっと偏重なものであったとしてもそれが最初のゲートウェイとかになってそこからよりよいものを知っていこうという風に興味を持つきっかけになればそれでも構わないのではないかなという風に思っています。東北の方、答えられる方で結構なんですけれども、今、大学関係であるとか東北大学さんでしたらみちのく震録伝とか、そういった形でも色々なアーカイブされてますよね。そこが、連携といっても同じプロジェクトと一緒にやる必要はないと思うんですけども、それがどの程度のクオリティーで、どの程度進んでいて、どこで重なったり別だったりと、今、現状感じられているかどうか、月1回会合があるであるとか、そういった各大学さん、各図書館の職員同士でどんな会話がされているかというのを

ちょっと感覚の部分で申し訳ないんですが、聞けたらなと思っています。

吉川 今、収集、保存、活用のサイクルの問題と二次資料の編集等の問題が出まして、関連して板垣さんから一点だけ、お願いします。その後、先ほどの各大学図書館との職員さんも含めた連携の実態というところに対して各機関の方から合わせてご発言頂こうと思います。

板垣貴志（神戸大学） 神戸大の板垣です。この会合には毎年参加してるんですけども、今年はものすごく大きく資料収集事業が進展していることに正直驚いております。一点だけ質問があるんですが、岩手県立図書館の齋藤さんにお聞きしたいんですが、展示を始められているということですよ、ね、「郷土教育資料に描かれた岩手のことばー沿岸被災地を中心にー」とか、あと、大船渡の3年目の展示が行われているということで、高森さんが言ったように収集と保存、そういうのは結構ミックスされてくるというのは僕も感覚として非常によく分かるんですけども、その集めた資料の利活用する時に、じゃあミニ展示でもしてみましようか、というのが単純な発想として出て来る。その時にどういう展示をされているのかなというのをお聞きしたい点なんです、ついでに言ってしまうと、例えば、今日配られている資料室ニュース第51号なんです、震災資料のメッセージ1.17の衝撃—というようなところで、割れた壺が展示されていると、この割れた壺を割れた壺としてだけ展示しても展示としてストーリーが立ち上がらないと思うんですね。要は何が言いたいかというと、これはフランス人の夫の結婚祝いにもらって、それが震災で割れたと。それが支援者の人がという風な、要はオーラルですね。オーラルをセットで残しておく、いざ展示という時に非常に伝わりやすい展示且つストーリーが立ち上がって展示に非常に役に立つということですね。なので、収集の段階でもし可能であれば不可能な場合も多いですけども機械的に資料を収集する

というより提供者の思いとか体験とか、その資料にまつわるメッセージとか思い出とかをセットにしておく、後々、時を経てその資料を展示にでも使うかというときに大きく役に立つ。且つ、図書館にとってもそういう風な機械的な資料集ではない部分、非常にウェットな部分といえるでしょうか、そういうような被災者との関係、機械的に資料を収集しない手法が図書館自体の評価を今後上げていく、資料の利活用にもつながっていくというように僕は感じています。感想も一緒に述べましたが。

吉川 それでは先ほど高森さんの方から、各大学や図書館での連携のあり方の実態、実際どうなっているのか、というところと先ほど板垣さんからも出ましたが、収集する段階でその活用を見越してオーラルや思いというのと、先ほどの田中さんの報告でも出ましたが一次資料とデータの関係もありますけれども、オーラルや思いというものと現物の資料をどう突き合わせて保存し、活用していくのかというところをどのようにお考えになっているのかという二点ですね。また、齋藤さんには具体的にどのような展示をやっていらっしゃるのか、ということを含めてご発言頂ければと思います。それでは席順で申し訳ございませんが岩手大学の遠山さんからお願いいたします。

遠山 岩手大学です。一点目、連携についてなんですけれども、私の感じているところでは具体的には連携らしい連携はしていないのかなというのが実情です。「震災資料を図書館に」というキャンペーンには名を連ねてますし、あとそれから東北三県での震災資料アーカイブの会議には参加しています。それから、情報交換会もあります。関わってはいるんですけど、だからといって具体的な連携が何かやっているか、あるいは計画があるかというところまではっていないのが実情です。収集したコンテンツの連携という部分ではNDLのひなぎくへの連携を考えているところではあるんですけども、それ以外では例えば、先ほ

どお話に出た企画展だったりとか、あるいは資料収集の分担みたいな話とか、そういったところの具体的な話は今のところないです。そして、あと、職員の感触としまして専任で非常勤職員が一名いるんですけど、それ以外の職員がほとんどタッチしていないんですね。ですから、一般の図書館職員の意識は私の感じではかなり低いと思います。先ほどお話の出ました例えば、企画展にしましても担当者の中ではもう三年目を迎えるわけですし、決して多くはないんですがそれなりに資料が集まって、コーナーを設けていますので、ちょっとした企画展とか、展示会でもやったら、という話は意見としては出て来ています。ですから、今後、その辺を検討していきたいと思っています。それから、二点目の資料提供者の思いなんですけれども、資料を提供される時に本人が面と向かって持って来られるという場合がほとんどないですね。通常、郵送だったり、あるいは誰か第三者を通して受け取ったり、ですからそういった思いがまったく伝わって来ないのが実情です。先ほど、板垣先生のお話を伺って、やはりその後の活用のことを考えた場合、そういったストーリー性とかその辺の提供される資料への提供者の思いやエピソード、そういったものをぜひ吸収できるものがあつたら今後、提供される時に例えば、事前に電話で問い合わせがあつたら「ぜひその辺のお話を聞かせてください」みたいなことを働きかけていきたいなと思いました。以上です。

湯目 東日本大震災アーカイブワークショップの今後のあり方の中にそういうことを考えていきたいなと思っていた矢先に高森さんから言われてドキッとしました。高森さんのお話について私から簡単にまとめます。今日の私の説明の中であった震災ライブラリーってやつを裏側にボランティアのイベントの時に置いたやつを表紙につけていたんですが、裏側にボランティア関連の資料をピックアップしたのが出てるんですが、これは全部自信を持っておすすめ出来ます。良書です。図書館司書の業務としてレファレンスというのは答えを

出してはいけない、相手の疑問に対して載っている情報の提示はしていく、その中から選択するのは利用者だというのが司書講習とかで習ったんですけども、こと震災資料に関しては私はそれがたがをはずしてもいいんじゃないかなと思います。その基準は読む人の感受性とか、ものすごく左右されちゃうんですけども、あなたがこういう本を求めているんだったら、これはいいことが書いてあるよ、ということが言える方が自分にとっての良書がおすすめと思っちゃうしかないとか、それでいいんじゃないかなと思ってきました。なので、3,000冊を今、私は端から読み始めてるんです。読むと、変だなと思う本も、ある人にとっては良書かもしれない。紹介する人が納得してその本にほれ込んでおすすめ出来ればいいと思うんですね。その中からの情報で訴えられる。ある本の中で、ボランティアの経験者の書き出しのところで、「これは自己満足のためにただダラダラとボランティアの日記を綴ったものでも何でもないし、何か訴えるものでもない。社会に対して理不尽さを書いたつもりもないし、ただ、その現実を余りにも知らな過ぎるから淡々と披歴していくだけだ」というようなことから始まるのがあるんですけども、文章が生々しいんですよ。今、手渡しでもなく、書き手の顔も分からないものであっても、何かしら文字のパワーというものはビンビン伝わってくるものは伝わってくる。低学年の子どもさんと両親を亡くしたひらがなだけの作文なんかものすごい力がありますよね。だから、それを感じた人が差はあっていいんであって、それでもって訴えていくことが震災資料についてはそこかなあという気が3年目になってしています。

齋藤力矢（岩手県立図書館） 連携についてなんですけれども、これは回答になるかどうか分からないんですけども、やっぱり岩手県は広いので、県立図書館は盛岡にあるんですけども、やっぱり沿岸まで2時間かかるので市町村の図書館の協力が必要かなと思っています。今回の震災資料を網

羅的に集めているんですけども、県立図書館はその前から郷土資料も網羅的に集めておりまして、市町村図書館に協力をお願いしているところです。今回も国立国会図書館の方にチラシを作ってもらったので、そのチラシを持って市町村の図書館を回って協力を依頼しているところです。どの位効果があるかは分からないところですけども、これから色々な形で協力をお願いしていくことが大切なのかなと思っております。あと、展示なんですけれども、当館の方では指定管理者制度を導入しておりまして、指定管理者の方で積極的に震災資料をPRして頂いておりまして、今、現在2つの展示をしているんですけども、こう切らさないようにずっと展示をしておりまして、関係機関から、岩手県警からも協力して展示したこともありまして、まあ岩手県警の方はこう「市町村図書館でも展示していいよ」、ということだったのでPRしたら市町村の図書館でも展示しているところがあって、なかなかいい展示だったのかなと思ってますし、あと赤十字もですね、協力して展示したりしてますし、神戸大学さんの方がいらっしゃった時に震災のポスターを展示するといいいPRになるよということで震災のポスターとかですね、あと市町村の震災当時の広報とか、うちの図書館で震災当時の全国の新聞を頂いたので新聞を展示したり、色々な機会に切らさないように色々な展示をしているところです。

佐藤 宮城県の場合は震災アーカイブの方で市町村連携ということですが、実はその連携先は主に市町村部局が担当になって頂いているところがほとんどで、図書館ですとか、生涯学習課がアーカイブの担当というところはごく一部なんです。今のところはそれまでやってきた市町村連携、市町村の図書館との連携とはまたちょっと別のパイプが出来てきているというのが震災に関しては県内の現状ではあります。それから、特に同じ仙台にあります東北大さんと連携があったかといわれると、連携らしい連携とはいえないかもしれないというところなんです、このアーカイブ事業を通

じまして何かこれからこの連携が強まっていくのかなという感じはしております。それから資料収集の際、やっぱり会ってお話出来る方からはお聞きはしているんですが、ただやはり郵送ですとか、あるいは既に最初からデジタルデータで作ったチラシですとメールで送っていただくことも多いので、個々の資料についてはなかなか背景にある思いというところまではなかなか伝わってこないところではあります。ただ巡回の時に、そういった個々の資料というわけではないですが、「あの時こうだった」、「みんな大変な思いをした」というお話に関してはお聞きしているので、それを何かの形で活かしていければいいのかなとは考えております。

田中 来年度、中越大震災10年ということで、実はそのテーマとしているのは「連携」なんです。それで色んなところへ提案をしていて、皆さんが知らないところで皆さんの名前も挙げさせて頂いて、多分、来年度もしかすると東北の皆さんや神戸の皆さんにお世話になる点が多々あると思っています。そういった意味では、そういうこれまでの図書館、文書館的、アーカイブ的な連携は来年度も当然「連携」のキーワードでさせて頂くと共に、来年はその連携の輪を広げたいと思っています。実は中越地震10年、併せて平成の市町村合併10年です。長岡市は新長岡市になってちょうど10年という年で、旧役場がみんな支所という形で残っています。実は来年、災害の歴史、それから災害の経験をキーワードにその支所を結べないかということを今、企画しています。具体的には講座とか、ということになるかもしれませんが、その後、今までは私たちと関係があるところがない支所の部局とちょっとつながって災害の歴史や災害の経験、どこの支所地域にもありますので、それをキーワードに結ぶ、これも一つの新長岡市の中での連携の輪を広げる、これがまさに来年度のテーマになっていますので、またその点で色々ご迷惑、ご指導頂く点もあるかと思っています。一つだけお話させて頂きました。以上です。

長崎 そうですね、東日本大震災アーカイブひなぎくを作ってからもうすぐ一年経つんですけども、引き続き連携先を増やして行って、多くの資料の所在がどこにあるのかというのが分かるような形にして行って、今、お使い頂くということはもちろんですけども、先々ですね、色々な方、後世の方々にもお使い頂けるような形で末永く続けていきたいと思っておりますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

吉川 はい、ありがとうございました。先程来から「連携」というのがキーワードで出ておりますけれども、宮城県図書館の佐藤さんも言われたように、これからますます連携を強めていかなければならない、というような状況なんだと思います。この会も第3回目を開かせて頂きましたけれども、来年も開催出来るよう神戸大学としても努力いたしますので、また、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。今日は、どうもありがとうございました。